

## 「経験機械」が示唆する「何か」—その正当性を問う—

今福 亮 (名古屋大学)

福利(well-being)に関する快樂説は、福利とは快樂である、と主張する。ここでの福利とは、或る人物にとってそれ自体で善いものである。倫理学において、(少なくとも人間の) 福利を重要だとみなさない道徳理論はほとんどなく、したがって福利が重要であるという点はどのような道徳理論に与したとしてもおそらく変わらない。むしろ争われるのは、どのような福利の理論がもっともらしいのか、である。福利に関する哲学的議論はその候補同士の論争であり、したがって自らのもっともらしさを示すだけでなく、相手からの反駁に対して応答する必要がある。

快樂説はそのような候補の一つだが、論敵から多くの批判が浴びせられてきた。その中でも、いわゆる「偽りの快樂」批判は非常に多くの哲学者によって提起されており、特に有名なのは Robert Nozick による「経験機械」の思考実験である。大雑把に言えばそれは、どんな経験でも与えてくれる機械があり、それにつなげられれば、あなたにとって理想的な人生を(経験機械の中で) 歩むことができる、あなたはこの機械につなげられることに同意するだろうか、という内容である。Nozick は、多くの人々は同意しないであろう、と言う。これによって示唆されるのは、もしこの思考実験に対するそのような直観が正しければ、快樂説(さらには経験のみが福利を構成するとするあらゆる説)は間違っている、ということである。というのも、この思考実験に対する直観は、福利を構成しているものは快樂のような経験だけでなく、他にも重要な「何か」がある、ということを示唆しているように思われるからである。だが、その重要な「何か」とは一体何なのか、ということまでは、この思考実験やそれに対する直観だけからは明らかでない。とはいえ、その「何か」の候補としてこれまで何も提案されてこなかったわけではない。

本発表の目的は、そのような候補として提案されている、「事実」説、「知識」説、これら二つの説に対して反論を試み、それによって「経験機械」やそれに伴う直観のもっともらしさに疑いを投げかけることで、快樂説を擁護することである。

事実説：或る事実は、或る人物がそれを知っているかどうかとは独立にその人物の福利に寄与しうる

知識説：或る事実を知ることが或る人物の福利を向上させる